



全ての人にこころの健康を

途上国の精神保健を支えるネットワーク(SUMH)理事長 青木 勉

「全ての人にこころの健康を」をテーマに、第 25 回多文化間精神医学会学術総会を主催させていただき、改めて感じたことがあります。それは、国際精神保健と地域精神保健の基本は地域ケアが中心であり、共通しているということです。

国際精神保健で長年お付き合いのある先生方、そして日本や、フランス、イタリア、カナダといった先進の地域精神医療や地域精神保健を実践している先生方の講演やシンポジウムをお聞きしていて、その根っこにある問題は、地域で患者さんがその人らしく生活できるようにいかに支援するかであるということを再認識することができました。例えば、日本の高齢者医療の問題と、カンボジアやインドの地域精神保健における問題は、多くが共通しているということです。わが国で今構築が求められている精神障害にも対応した地域包括ケアシステムは、実は開発途上国でも重要であると思います。国により、地域により、医療、保健、福祉、教育の水準は様々違い、高齢化の程度も違いますが、基本は障がいを負った人が、地域の中で生活することをいかに実現していくかが大切であるということを学ぶことができました。

当 SUMH は、我が国の地域精神保健の経験と知識を、開発途上国の地域精神保健に生かして活動を続けてきましたが、今回の学会を主催した経験から、この活動の重要性と合理性を再確認することができました。これからも、会員の皆様のご支援をいただきながら、活動を継続して参りたいと思います。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

目 次

I 第 70 回保健文化賞受賞

- | | |
|----------------|------|
| 1. 保健文化賞受賞のご報告 | 青木 勉 |
| 2. 保健文化賞受賞に思う | 手林佳正 |
| 3. 保健文化賞受賞の意義 | 野崎章子 |

3. 多文化間精神医学会カンボジアシンポジウムを通じた SUMH の活動の振り返りと分析・評価

- | | |
|----------------------|------|
| 4. カンボジア・シンポジウムに参画して | 丸谷俊之 |
|----------------------|------|

II 第 25 回多文化間精神医学会学術総会

- | | |
|-----------------------------------|---------------|
| 1. 大会長として | 青木 勉 |
| 2. 「カンボジアのメンタルヘルス支援」座長と演者
となって | 座長と演者
手林佳正 |

III 総会報告と緊急支援への御礼

- | | |
|------|------|
| 編集後記 | 丸谷俊之 |
|------|------|

I 第 70 回保健文化賞受賞

1. 保健文化賞受賞のご報告

青木勉

保健文化賞は、戦争の傷痕が深く残り、衛生環境が悪化する状況にあった 1950 年に、わが国の保健衛生向上のために第一生命保険によって創設されました。創設当時は結核や栄養不足など社会的に喫緊の課題である分野での活躍を対象としていましたが、近年では生活習慣病対策、高齢者や障がい者への福祉、海外医療や疾病対策など、その時代におけるさまざまな課題に、継続的に取り組んでこられた方々が表彰されています。今年度は、個人、団体合わせて 58 の応募があり、その中から私共特定非営利活動法人途上国の精神保健を支えるネットワークが受賞の栄に浴することとなりました。これもひとえに、当団体をご支援いただいている会員の皆様のおかげであると深く感謝しております。

2018 年 10 月 10 日に、明治記念館で第 70 回保健文化賞の表彰式が、10 団体、個人 5 名、そして関係者合計約 50 名が出席して、厳かな雰囲気の中で、挙行されました。はじめに、厚生労働大臣から表彰状、主催者の第一生命保険株式会社からは感謝状とともに賞金(団体 200 万円、個人 100 万円)が贈られました。そして後援団体の朝日新聞厚生文化事業団、NHK 厚生文化事業団の代表からのご挨拶と記念品の授与式が続きました。団体の多くは、SUMH と同様の特定非営利活動法人であり、10 年以上の活動経験を有しています。また、心のケアや精神保健関係者が 3 団体、1 個人いらしたことも、とても印象深いことでした。そして何よりも感銘を受けたのは、我が国で真摯に他人のために尽くそうとする志の高い受賞者の方々にお会いできたことです。表彰式に出席させていただいた最大のご褒美と思っております。

翌日、皇居にて天皇皇后両陛下に拝謁し、お言葉を賜りました。皇居は、長さが 160 メートル、天井までの高さが 20 メートルはあるのではないかという建物の中に、侘び寂びを生かした内装が施されておりました。天皇陛下からは、「さまざまな困難を乗り越え、それぞれの分野や地域において、保健衛生の向上に務めてこられたことを深く感謝します。健康に気をつけて、引き続き保健衛生の向上のために尽力してください」とのお言葉を賜り、当会の活動の礎としていきたい所存です。この受賞を機に、国際精神保健への貢献を一步一步進めていきたいと思います。これからもご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

2. 保健文化賞受賞に思う

手林佳正

予期せぬ受賞でとても驚いた。企業や政府、皇室も巻き込んだ歴史のある表彰なので、時代的には胸を張っていいということなのだろうと思った。20 数年間にわたり、表に裏になって支えていただいた方々に、改めてお礼申し上げたいと思う。

「木を見て森を見ず」という諺がある。私たちのプロジェクトは長い内戦で社会資源が崩壊したなかで必要な「精神保健に到達できていないカンボジアの村の人々に具体的にサービスを届ける」という、いわば「木」については工夫し長きにわたって豊富な実績を持ってきたが、その努力は「地域精神保健活動をカンボジアの公的地域保健サービスに含ませる」(＝「森」)のための「モデル活動」であった。「森」を見つめ続けてきているが、その達成については未だ途上にあると言わざるを得ない。

そうになっていることには、キラーアサンプシオンとしての現地の政治経済状況の展開などいくつかの要因が考えられるが、内部的には長年養成し訓練した現地の専門職員を失ったことは大きく、目標設定を見直すことを含めて活動の見直しに直面していると思う。次の一步はどうするのがよいだろう、皆様の積極的な関与をお願いしたいと思う。



第 70 回保健文化賞贈呈式にて、青木・現理事長(左)と手林・初代理事長(右)

※ 第 70 回保健文化賞受賞者一覧については、厚生労働省の報道発表資料のページで閲覧できます。

第 70 回「保健文化賞」受賞者の決定について

URL:

https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000175593_00001.html

3. 保健文化賞受賞の意義

野崎章子

自身にとっての 2018 年の最大の出来事は、保健文化賞受賞であった。資金獲得担当の理事として、2018 年 3 月中に理事長と連絡を取りながら、かなりの急ピッチで保健文化賞応募書類を作成した。応募書類作成は苦ではなかったが、心配なことは、最もニューカマーで新人理事である自分が、これまでの SUMH の成り立ちや貢献、成果、信念等を叙述できるかということであった。

しかし、SUMH は着実にカンボジア現地において成果を挙げてきた。応募書類中にも記載したが、これまで現地の人材育成、資格の国家資格化や、数千人単位での精神科医療の提供等、驚くべきである。外務省の海外 NPO の報告書中にも SUMH の名前を見つけることができ、その報告書も応募書類に資料として添付した。自身が経験していない活動も、これまでの資料や理事らの資料から記載した。成果としてのカンボジア現地および日本での数字も記載した。最新人理事が、果たして SUMH の活動の神髄や實際を応募書類中に書き切れているかという心配をよそに、見事に SUMH は 2018 年 8 月に第 70 回保健文化賞を受賞し、初代理事長の手林氏、現青木理事長らが授賞式において厚生労働大臣や第一生命保険株式会社による表彰を受け、青木理事長は SUMH の代表として皇居に詣で、天皇皇后陛下の拝謁に至った。

やはり、SUMH は表彰に値するだけの活動、そしてカンボジア現地の人々への貢献を行ってきたのだと実感した。理事のみならず、多くの方々のご支援があつてこそと思いを巡らし、今後への勇気をいただいた出来事であった。



2014 年 3 月時点でのアンコールチュム・リファerral病院精神科外来棟（SUMH による支援の掲示あり）

II 第 25 回多文化間精神医学会学術総会

1. 大会長として

青木勉

2018 年 11 月 9 日、10 日の 2 日間、「すべての人にこころの健康を」をテーマに、千葉県成田市のホテル日航成田で第 25 回多文化間精神医学会学術総会が開催されました。私が大会長を務め、海外からは、長年当会の活動でご縁のあるカナダ・ブリティッシュコロンビア大学のソーマ・ガネサン先生、TPO カンボジアのソティアラ・チン先生、イタリア・トリエステからマリオ・コルッチ先生、フランス・リールからジャン＝リュック・ローラン先生をお招きし、賑やかで実りある学術総会となりました。

国際精神保健をテーマとした、我が国初めての学会であり、メインシンポジウム「すべての人にこころの健康を」では、「グローバル・メンタル・ヘルス：国連での経験から」井筒節先生（東京大学総合文化研究科）、「インドと日本における精神科強制入院と意思決定支援：当事者と医師による共同質的研究について」を杉浦寛奈先生（東京大学 医学系研究科精神保健学）、「フィリピンにおける子どものメンタルヘルスケア」について宇佐見政英先生（国際医療研究センター国府台病院）、「その文化社会に生きる人々に役立つ精神保健支援を求めてー心理士によるカンボジア・ネパール・ブラジル・ドミニカ共和国などでの経験から All welcome を越えて」を当会の手林佳正先生（西八王子カウンセリングルーム）、そして指定発言として「精神科看護の観点から考察する」を当会の野崎章子（千葉大学大学院看護学）に発表していただきました。我が国においても、グローバルメンタルヘルスへの取り組みはアジアを中心に、徐々にではあるが活発となりつつあります。そこで、mhGAP を克服するために、世界と我が国のグローバルメンタルヘルスの取り組みを検討し、今後の発展を目指そうというのが本シンポジウムの趣旨であり、狙いでした。具体的には、「すべてのひとに心の健康を」をスローガンに掲げる国連をはじめ世界の取り組みを概観し、ついで日本の臨床家、研究者によるアジア、中南米等の様々な地域での実践や研究を論じ、世界と日本の取り組みの現状を比較しつつ、今後の展開について論じ、提案する機会となりました。様々な分野のシンポジストの発言は大変興味深く、多岐に渡りましたが、すべての発表者に共通した内容として、医学モデルから社会モデルへの脱却が必要であるとの提言が印象に残りました。

また、「カンボジアのメンタルヘルス支援-カンボ

ジアにおける地域精神保健包括ケア活動モデル作り」を当会が主催して開催しました。約 20 年間にわたり、当会が日本とカンボジアの精神保健医療福祉の架け橋となり、現地の精神保健医療水準の向上に貢献してきました。その活動を振り返り展望すると共に、新たな臨床研究の報告を含め、今後の我が国におけるグローバルメンタルヘルスの発展を期して、このシンポジウムを企画しました。手林佳正先生（西八王子カウンセリングルーム）：内戦後のカンボジア地域精神保健支援 23 年で、できたことできなかったこと、野崎章子先生（千葉大学大学院看護学研究科）：適正技術からみた現地スタッフへの精神科看護教育、青木利江子先生（東京医科歯科大学保健衛生学研究科）：カンボジア精神保健国際協力の自立、持続に向けての取り組み-プロジェクトの評価と課題-，そして丸谷俊之先生（東京工業大学保健管理センター，錦糸町クボタクリニック）：カンボジアにおける統合失調症患者と家族についての調査と支援，について発表していただき，座長は窪田彰先生（錦糸町クボタクリニック，手林佳正先生（西八王子カウンセリングルーム）にお願いしました。このシンポジウムは，まさしく当会が行ってきた活動の集大成であり，今後の活動の指針となるものであると思います。

大会長講演として「すべての人にこころの健康をーカンボジアにおける 18 年間の精神保健支援の経験から」を行いました。当会の活動の総括と，この活動を通じて，日本の地域ケアの推進につながったこととお話ししました。

当学会の参加者は合計で 177 名，前日旭中央病院で行われたソーマ・ガネサン先生の講演，学会の翌日にやはり開催された，フランスリールのジャン＝リュック・ローラン先生とイタリアトリエステのマリオ・コルッチ先生との意見交換会への参加者を含めると，270 名にのぼり，盛会で終了することができました。皆様のご協力にこの場をお借りして感謝いたします。



ソティアラ先生による特別講演

2.「カンボジアのメンタルヘルス支援」座長と演者となって

手林佳正

今年度の多文化間精神医学会が，当 SUMH の青木勉理事長が大会長となって開かれ，SUMH の活動にまとまった発表の機会が与えられた。経過や狙い，達成したことや現地職員研修などについて詳細な報告があった。

ぼくはプロジェクトの経過について次のようなまとめをした。

準備期	1996-	SUMH 設立，3 つの現地調査
現地基礎期	2001-	シュムリアップに現地事務所を設立，ベースライン調査，日本人 2 名カンボジア人 14 名
人材養成期	2003-	2 年間の地域精神保健専門家養成に着手，日本から 20 数名の講師，地域精神保健モデル活動（骨子は下の表を参照）開始
モデル活動期	2006-	通所デイケアを開始，モデル活動継続，日本人 1 名カンボジア人 9 名
現地化期	2007-	シュムリアップ州病院内に拠点を移す，州病院外来での心理教育，日本人の駐在をなくす，カンボジア人 4 名
財政支援期	2010-	2 つの保健区病院でそれぞれ月 2 回の精神科診療を加える，地域保健や関連 NGO 職員への心理教育，PRCP 研修
現在	2017-	現地駐在代表が死亡，保健区病院への支援を 1 か所に，現地職員技術研修に苦心

カンボジアの地域精神保健ケアモデル by SUMH

1 次医療圏；

- ・保健センター職員や地域リーダーとの連携によって精神保健ケアが必要な人々を見出し訪問活動をする。必要場合は受診勧奨。
- ・受療者と家族が生きる地域において支援の必要な事例に対して地域においてその地域社会が持つ受容性や支援力をさらに高めるための，近隣住民と保健センター職員，寺院の僧侶や学校教師，関連 NGO 職員などからなる小集団心理教育活動（キーパーソンミーティング） <看護師，心理士な

いし PSW を雇用する＞

2 次医療圏；

- ・保健区病院における一般精神科外来診療
＜精神科医師か、精神科診療研修を受けた一般科医師による＞
- ・外来待合室における患者と家族対象の心理教育
＜看護師、心理士ないし PSW を雇用する＞
- ・外来待合室における慢性患者対象のリハビリテーションデイケア＜上と同じ＞
- ・州病院における精神科専門医師による診療

3 次医療圏；

- ・首都の大学教育病院における精神科専門医師による外来診療と入院治療



2017 年 2 月，SUMH-C ディレクター（当時）のピサル氏（右）とバナック氏と丸谷（今号編集担当）



現在のシェムリアップ州立病院内 SUMH メンタルヘルス・リハビリテーションセンターと精神科外来



家庭訪問で、薬袋に飲み方を記入するピサル氏（2014 年 3 月）



カンボジア・シンポジウム，ディスカッションの光景

3. 多文化間精神医学会カンボジアシンポジウムを通した SUMH の活動の振り返りと分析・評価

青木利江子

今回のカンボジアシンポジウムに際し、理事長から故ピサル氏（元 SUMH-C 現地代表）の作成した 2001～2017 年の SUMH, SUMH-C の現地活動に関するデータを受け取った。シンポジウムではその活動を OECD DAC の国際評価基準、JICA の評価基準（妥当性、効率性、有効性、インパクト、持続性）により「自立、持続性」をテーマにこれまでの活動の評価、分析をした。最も感じたことは活動を振り返り分析、評価することの大切さで、それが現地活動の理解やエビデンスに基づいた方向性を考えることにつながることを改めて感じた。

現地の背景には資本主義化による都市農村部の貧富格差と依存の構造の課題がある。自立、持続可能性という点では、現地 SUMH-C スタッフのニーズに基づき【妥当性】を持ち実施した農村部巡回診療プロジェクトは非常に多くの精神疾患を持ちながら医療と繋がれない人々に【効率性、有効性】のある医療を提供し、農村部病院医師による精神科外来継続、病院予算による自立は、現在ある物的、人的社会資源を生かし、現在の組織やシステムの中に活動を移譲するとても【インパクト】【持続性】のある自立の道を歩めたと考える。それを導いたのは SUMH が人材養成した PSR（心理社会リハビリテーション専門家）であった。人材養成は予算の関係もあり継続はその後でできなかったが養成した人材はカンボジアの中核的な活動をしている。地域精神保健モデル活動は、駐在した日本人専門家の取り組みにより特徴があった。（家庭訪問、センターアクティビティ、キーパーソンミーティング）また地域による疾患構造の特徴（抑うつ、不安障害の増加）もあり、丸谷理事の患者、家族研究分析、Dr.Sotheara の発表にあった文化特性による診断基準、経済的自立のためのプログラムなども参考に、現地のニーズに基づき巡回診療のように自立、持続性のある活動を模索し、共に考え支援していく必要がある。

今後は現地 SUMH-C が自立、持続性のある道を構築することが、この活動を支援して下さる多くの方々、本年活動に対して評価していただいた保健文化賞にお応えすることに繋がると考える。最後に共に活動の分析をしてくれた篠原理事、貴重なデータを残してくれた故ピサル氏にこの場を借りて感謝したい。

4. カンボジア・シンポジウムに参画して

丸谷俊之

本シンポジウムは、カンボジアにおける SUMH の活動を辿り、その意義を再認識し、それを紹介し、今後の展望を語るものであった。その中で私の発表は SUMH だけではなく、プノンペンソティアラ先生が率いる TPO カンボジアにおける研究活動も含むものであった。

イントロダクションでは、自分が最初に SUMH の活動を見に行ったときのことを述べた。シェムリアップにおける活動は、人的にも物的にも経済的にも限られたところでなされており、とても不十分な状況である。その中でも、農村部を訪問し、鎖に繋がれている患者さんをみつけて、精神科医療につなげて、鎖から解放したのだった。これは私がこの活動にはとても意義があって、やるべきことだと思った理由である。患者の具合が悪くなれば、その影響は周りの家族にも及ぶわけであるから、一人を救えることができれば、その周りの人たちも救うことができる。それを限られた人的物的資源をもってしても、適切な動きをすることで実行できるのである。

そのような背景もあって、研究のテーマとしたのは統合失調症の患者とケアをする家族の生活の質および生活状況についてである。学会では通常の研究発表の手順で、方法、結果、考察、と進めたが、この研究で大変であったことの一つはクメール語についてであった。

既に英語版はある統合失調症患者、家族それぞれの QOL 質問紙のクメール語版を、翻訳、逆翻訳、両者突き合わせの修正を経て完成させたのであるが、この一連の作業にはソティアラ先生の多大なご尽力をいただいた。それ以外の研究の説明書類や承諾書については、日本の翻訳会社に依頼してクメール語版を作ったのであるが、それをソティアラ先生に見せたら、文字が読めない、と仰る…。Word for Mac の前のバージョンでは正しく表示されていたのであるが、これをバージョン 2016 で開くと、クメール語のフォントをきちんと入れているにもかかわらず、いくつものクメール文字が部分的に楕円形になってしまい、存在しない文字になってしまう。私がクメール語を勉強しなすぎると言われればそれまでだが、シンプルな文字化けならおかしいことに気がついたと思うが、文字の一部が楕円や四角に置き換えられていたため、指摘されるまで気が付かなかったのである。こちらは、日本から必要分コピーをしてどっさり調査用紙を持ってきたというのに、やり直しとなった。

とまあ、これは今回の現地調査にあたって起きたさまざまな不手際や不具合の一部であって、自分が日頃常駐しているわけではない海外、しかもその国の言葉を知らない、という状況で調査を行うことの大変さをいろいろ知ることになったのである。

それをなんとか乗り切れたのは、TPO カンボジアとともに、SUMH カンボジアのビボル氏、バナック氏の多大な協力によるものであり、この場を借りて深く感謝したい。

こちらの結果については、解析している最中であるが、様々な要因がある中、他の途上国における先行研究と同じく、経済状況が及ぼす影響が大きい。インタビューへの回答の中にあっただのは、「薬を買ったら米を買えない。米を買ったら薬を買えない」であった。また、インタビューに応じた家族の半数が自らも慢性疾患を抱えており、将来患者を誰がケアするのか案じていた。経済的な支援や地域において家族も含めてサポートするシステムが望まれるわけだが、なかなか難しいところである。

先のことは不透明なことも多いが、結果をまとめて、今後の支援に役立てることのできる知見を抽出したいと考えている。



SUMH-C のスタッフが買ってきてくれた果肉の赤いドラゴンフルーツ（SUMH-C 事務所にて）



カンボジアの伝統料理、アモック（編集担当の大好物）

III 総会報告と緊急支援への御礼

丸谷俊之

2018 年 6 月 17 日（日）14 時 30 分より、錦糸町北口ビル 5 階、錦糸町小ホールにて SUMH の 2018 年度の総会が開催された。今まで 2 箇所において実施されていたアウトリーチ外来のうち、アンコール・チュム病院における外来を中止した理由について、現地医師がサブスペシャリティとして精神科も診療可能な状況となったことが説明され、本件は了承された。

また、今後の活動計画には、SUMH の活動を記録した小冊子を発行し、国際精神保健の啓蒙に努めることや、ベースライン調査と比較して、SUMH の現地活動の効果を測定する調査を行なうことが盛り込まれた。

総会に続き、15 時 30 分より現地スタッフ研修報告会が開かれた。その詳しい内容はニュースレターの前号に掲載されているので、ぜひご一読いただきたい。

さて、今回の総会のご案内にあたり、チラシで「URGENT 今すぐ支援を！」と緊急の呼びかけを行った。現実的に、このチラシを発行する直前の定例拡大理事会において、予算の枯渇について討論がなされていた。配色や表現がドギツイ等会員諸氏においても賛否両論はあったかと思うが、文面に一切誇張はなく、本 NPO の現実の懐事情に沿って書かれたものであるため、ご理解いただければ幸いである。なお、文面やレイアウトについては、昔私がコンスタントに寄付をしていた、国境なき医師団（MSF）の緊急支援の封書に負っているところが大きい。

このような呼びかけをした手前、私も年会費に寄付を加えて協力させていただいた。大変ありがたいことに、このチラシの送付後、総会開催日翌日までの間に、年会費と寄付を合わせて総額 43 万 4 千円の振込をいただくことができた。これによって現地の活動のさらなる継続が可能となり、大変ありがたいことだと思っている。ご協力いただいた会員、賛助会員諸氏にはこの場を借りて改めて深く御礼申し上げます。

また、この予算枯渇のピンチにおいて、製薬会社からの寄付が減額、あるいは中止される傾向がある中、別の資金獲得についての方策が提案された。その申請書は、野崎章子理事によって作成されたのであるが、それが今回の第 70 回保健文化賞受賞に結びついた。野崎理事の尽力に感謝するとともに、皆様の活動へのご支援がこのような形で認められたことを大変嬉しくかつ誇らしく思う。

編集後記



緊急支援呼びかけ、保健文化賞への応募、総会、保健文化賞受賞、学会、と今回はイベント続きでした。保健文化賞は由緒ある賞で、青木理事長は天皇陛下に拝謁する機会にも恵まれ、本 NPO としては大変名誉なことでした。

カンボジアの政治状況が芳しくないのは、会員諸氏も報道等からご存知と思います。総会の報告にもある通り、SUMH カンボジアは一時期より活動を縮小し、スタッフも少なくなった中で運営しております。今後我々を取り巻く諸々の状況変化をよく見据えながら、これからの活動方針をその都度調整していく必要があると思っております。

引き続き、ご理解ご支援の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

編集担当 丸谷俊之

SUMH の会員として、また寄付金によって一緒に途上国の精神保健を支えてください。

カンボジアの患者さんの笑顔を思い浮かべ、当法人にご寄付頂けますようよろしくお願い申し上げます。

【年会費】一般 10,000 円 賛助・学生 3000 円

【会費・寄付金の振込先】

銀行振り込みの場合

銀行名：楽天銀行 第二営業支店(支店番号 252)
口座名：特定非営利活動法人 途上国の精神保健を支えるネットワーク
口座番号：普通 7385345

郵便振替の場合

加入者名：途上国の精神保健を支えるネットワーク
口座番号：00170-2-535294

郵便振替は振替用紙に、住所・氏名・Tel & Fax・E-mail・会費と寄付金のいずれか・SUMH へ一言を明記の上、お振り込み下さい。

SUMH 日本事務局

〒130-0013 東京都墨田区錦糸 3-5-1
錦糸町北口ビル
TEL 03-3812-0736
HP: <http://www.sumh.org>
Mail: info@sumh.org

SUMH Cambodia

Mental Health Rehabilitation Center,
in Siem Reap Provincial Hospital,
Mundol Moi, Siem Reap, Cambodia
Postal Address:
P.O.Box 93102 GPO Siem Reap Angkor, Cambodia